

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00748

研究課題名（和文）リメディアル学生のメタ認知を活性化する英語指導法の研究

研究課題名（英文）A Study of Fostering Metacognition in Remedial English Classes

研究代表者

牧野 眞貴（Makino, Masaki）

近畿大学・法学部・准教授

研究者番号：90581174

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：メタ認知は学習力を高めるための重要な要素であり、メタ認知の育成により、自己の学習をモニタリングしたりコントロールする力が高まると考えられる。メタ認知と学習の振り返りには密接な関係があることより、本研究では英語リメディアル授業で振り返りシートを用いた振り返り学習を行い、学生の学習を振り返る力の強化を図った。毎回の授業の最後を振り返りの時間とし、(1)その日の授業内容、(2)授業でわからなかったことや間違ったこと、(3)授業で得た知識の3項目について記入させた。この結果、メタ認知の活性化には振り返り学習が有効であることが検証された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの英語リメディアル教育では、学生の学習意欲を高める、あるいは英語学習に対する自己効力感を高める指導法についての研究が見られるものの、メタ認知についての研究は多いとは言えない。メタ認知が効果的に働くことにより学習力が大きく伸びるとされているが、自身のこれまでの研究ではリメディアル学生のメタ認知は低い傾向にある。従ってメタ認知を活性化する英語指導法の開発により、英語だけではなくリメディアル学生の学習力が伸びることに期待できる。リメディアル教育の質の向上はユニバーサルな課題であり、本研究結果を世界に向けて発信することは、リメディアル教育に貢献すると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Metacognition is a critical component of successful learning, this study focuses on this framework for enhancing the English ability of students in remedial English classes. Fostering metacognition supposedly improves students' skills in monitoring and controlling their cognitive processes. Reflection, for example, is a fundamental part of the plan-monitor-evaluate process; hence, this can be an effective device for metacognitive training. Reflective learning is, therefore, used in remedial English classes to foster students' metacognition. In each class, students wrote a reflection paper at the end of the class, focusing on three questions: (1) What was the topic of today's class? (2) What did I not understand or misunderstand? (3) What knowledge did I acquire in today's class? This exercise confirmed that students' metacognition improved.

研究分野：リメディアル教育

キーワード：メタ認知 リメディアル 英語 振り返り学習

1. 研究開始当初の背景

入試の多様化で、大学の求める学力に満たない学生の入学が後を絶たず、各大学はリメディアル教育に取り組んでいる。英語リメディアル教育(極めて英語力の低い大学生を対象とした英語教育)の研究は、教材や指導法の開発にとどまらず多岐にわたっており、筆者もそれらの研究から知見を得て、英語リメディアル教育の研究に取り組んでいる。そのような中、近年、学習場面におけるメタ認知の重要性を強く認識するようになったが、筆者の研究では、英語リメディアル学生のメタ認知が低いことが確認されている。学習の振り返りであるメタ認知的活動が正確にできておらず、特にメタ認知的モニタリングの働きが弱い、つまり、リメディアル学生は、意識的に自己の学びを振り返る力が弱いと考えられる。これまでの指導経験でも、リメディアル学生は自分が今何を学んでいるかを意識せず作業的にノートをとったり、教科書の内容を考えず英語を目で追うだけの様子が見られた。教科書の練習問題の答え合わせの際には、間違った個所に赤ペンで正答を記入するだけで終わっており、問題を読み返したり、辞書を引いて正答を確認したりする学生はわずかであった。従って、英語授業において、リメディアル学生のメタ認知が活性化すれば、効果的な学習が可能となり、その結果、授業の理解が深まり、英語力が向上すると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、リメディアル学生のメタ認知を活性化する英語指導法を開発することである。本研究では、振り返りシートを活用してリメディアル学生の学習を振り返る力を強化し、メタ認知を促進させる。

3. 研究の方法

本研究では、文献研究、学会参加、学会発表、質問紙(メタ認知測定)、インタビューと研究の手法は多岐にわたった。具体的には、まず、自身のこれまでのリメディアル授業の経験や文献研究より振り返りを重視した授業を実施した。その授業に対する学生へのインタビューを実施して指導法を見直し、指導法の完成度を高めた。その過程で、国内・および海外で行われた学会に参加し、他の研究者の発表を視聴したり、自身の研究成果を報告して助言を受けたりして、指導法を完成させた。以下に、完成に至った最終の研究について報告する。

3.1 研究協力者と対象授業

本研究の協力者は、私立大学に通う英語非専攻の大学1年生である。学生は英語習熟度別クラス編成で最下位に位置付けられたクラスに在籍しており、リメディアル教育の対象となっていた。研究協力者が受けた授業は1年生の必修英語の授業であり筆者が担当した。授業は週に2回行われ、1回はスピーキング、もう1回はTOEIC対策の授業であり、本実践はTOEIC対策授業で実施した。

3.2 メタ認知を活性化する方法

本研究では、毎回90分授業の最後の20分程度を振り返りの時間とし、シートに授業の振り返りを書かせた。振り返る項目は「①その日の授業内容」、「②授業でわからなかったことや間違ったこと」、「③授業で得た知識」の3項目とし、記入を終えた時点で「②授業でわからなかったことや間違ったこと」について、次に同じ問題が出てきた場合正解できるよう、授業の説明や問題の解説を思い出し、正解がなぜそのようなになるのかを再確認するように指示した。しかし、省察力の低いリメディアル学生にただ振り返るようにと指示しても、何をどのように振り返って良いかわからないと考え、第1回目授業では筆者が振り返りのポイントを明示したり、振り返りの例を示すなどして、振り返り学習をサポートした。振り返りシートはA4サイズの用紙の表に2回分、裏に2回分の合わせて4回分の振り返りが書けるようになっており、5回目以降は新たな用紙を配布し、枚数が増えるごとにホチキスで留めていった。シートは記入後筆者が回収して目を通し、スタンプを押して返却した。記入量が極めて少ない場合や適当に書いていると判断した場合は、筆者が授業を十分に振り返るようにとコメントし、さらに十分に学習を振り返っていない場合には、シートに振り返りのヒントを与えた。振り返り学習は2回目から15回目までの授業で14回実施した。

3.3 分析

学生のメタ認知は、阿部・井田(2010)が成人用メタ認知尺度として提案した28項目(表1)を用い、第1回目授業(事前)と第15回目授業(事後)で研究協力者のメタ認知を測定した。オリジナルの質問紙のQ8の文言は「意識的に立ち止まり、自分の理解を確認する」となっていたため、回答者がいつのことか判断し難いと考えた。そこで、本研究では前後の質問の内容より判断して、Q8に「課題に取り組んでいる最中」という文言を加筆した。質問紙の内容は、メタ認知的活動であるメタ認知的モニタリング(Q1~11)とメタ認知的コントロール(Q12~20)、そして

メタ認知的知識(Q21~28)の3領域に分かれている。質問の評定は、阿部・井田(2010)と同様に「(6)とてもよくあてはまる, (5)大体当てはまる, (4)やや当てはまる, (3)やや当てはまらない, (2)あまり当てはまらない, (1)全く当てはまらない」の6件法を採用した。本研究では回答の数値を「メタ認知スコア」と記す。

表1 メタ認知尺度

メタ認知的 モニタリング	1	答える前に、問題に対する別の答えについても検討している
	2	問いに対して考えられる選択肢を全て考慮したかどうか、自問している
	3	学んでいるとき、教える人がどんなことを自分に期待しているのかわかって
	4	課題の中の重要な関連性を理解しようと、繰り返し振り返っている
	5	課題が終わったら、自分が学んだことを要約している
	6	課題に取り組んでいる最中も、自分のやり方が上手くいっているか自分で分
	7	学んだことを、どれぐらい理解しているか、正確に判断できる
	8	課題に取り組んでいる最中、意識的に立ち止まり、自分の理解を確認する
	9	課題が終わった時点で自分の立てた目標の達成度を評価している
	10	課題や問題が解決した後、全ての選択肢を考慮したかどうか振り返っている
	11	課題が終わった時点で、できる限り学んだかどうか振り返っている
メタ認知的 コントロール	12	新しい知識や情報について、その意味や重要性に注意を向けている
	13	学ぶときに、自分の理解を助けるために絵や図表を描く
	14	初めて聞く情報や知識は、自分の言葉に置き換えてみる
	15	理解できないときは、やり方を変えてみる
	16	自分の理解の助けになるようテキストの構成や目次を利用している
	17	課題をはじめるとき、説明をよく読み、理解してから始めている
	18	読んでいることが、自分の知っていることと関連していないか、考えながら
	19	頭が混乱した時は、今までの考えを白紙に戻して新たに考え直す
	20	読んでいてわからなくなったときは、一時中断して読み返してみる
メタ認知的 知識	21	過去に上手くいったやり方を試みている
	22	学ぶために十分な時間をかけるようにする
	23	自分が何が得意で何が不得手かをわかっている
	24	テストが終わった時点で、テストの出来具合を判断できる
	25	重要なことがらできたときには、ペースを落として課題に取り組む
	26	重要なことがらに対して、意識的に注意を向けている
	27	そのテーマについて何らかの知識があるときに、もっとよく学べる
	28	自分の興味があることについては、より深く学んでいる

3.4 結果

学生のメタ認知スコア記述統計量を表2に示す。事前・事後のメタ認知スコアに有意差が見られるかを確認するため、Wilcoxonの符号付き順位検定によりメタ認知スコアを分析した(表3)。結果、メタ認知スコアは3領域全てに有意差が見られた。これより、振り返りシートを記入した実験群のメタ認知3領域のスコアの伸びが確認された。

表2 メタ認知スコア記述統計量

		度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
モニタリング	事前	20	1.00	4.45	3.29	0.77
	事後	20	2.36	4.73	3.71	0.67
コントロール	事前	20	1.00	5.22	3.67	0.92
	事後	20	2.89	6.00	4.05	0.82
知識	事前	20	2.88	5.00	3.95	0.68
	事後	20	3.13	5.38	4.28	0.74

表3 メタ認知スコアの変化の分析

	モニタリング	コントロール	知識
Z	-3.019	-2.215	-2.760
漸近有意確率 (両側)	0.003**	0.027*	0.006**

Note. N=20

* $p < .05$. ** $p < .01$.

本研究結果から、リメディアル学生のメタ認知を活性化するためには、振り返りシートを活用した振り返り学習が効果的であることが確認された。

4. 研究成果

本研究結果から、振り返りシートの活用により、リメディアル学生のメタ認知的モニタリング、メタ認知的コントロール、そしてメタ認知的知識のスコアの伸びが確認された。学生は、振り返りシートを記入することで、今まさに自分が何を学んでいるかを自覚した。また、自己の学びの点検や分析ができるようになり、モニタリングが上手く働くようになるとともに、学習の立て直しや修正ができるようになった。さらに、振り返りシートの記入により、授業に集中し、意識的な学習を行った。その結果、「授業がわかる」を実感し、作業的ではなく、意識的な学習が行えるようになる。加えて、振り返りシートは学習の記録であるため、自分がどれだけ頑張ったかの証になる。学生が自己の変化を実感し、振り返りシートの記入が英語学習の動機づけになったことも考えられる。以上のことから、振り返りシートの記入により、リメディアル学生のメタ認知的活動が活性化したことが示唆される。メタ認知的知識について言えば、メタ認知的活動を通してメタ認知的知識が形成・確認されるため（三宮，2008）、メタ認知的活動の働きが良くなってきたことにより、自己の問題点の改善策を検討する中で方略の使用も上手くなり、課題についての知識や課題解決の方略についての知識など、メタ認知的知識も深まった。以上より、振り返りシートを活用した振り返り学習により、リメディアル学生の学習を振り返る力が強化され、メタ認知が促進したことが確認された。

【引用文献】

- 阿部真美子・井田政則（2010）. 「成人用メタ認知尺度の作成の試み—Metacognitive Awareness Inventory を用いて—」『立正大学心理学研究年報』1, 23-34.
 三宮真知子（2008）. 『メタ認知：学習力を支える高次認知機能』京都：北大路書房.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 牧野眞貴	4. 巻 14
2. 論文標題 英語リメディアル授業におけるメタ認知促進の試み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 近畿大学教養・外国語教育センター紀要（外国語編）	6. 最初と最後の頁 101-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Masaki Makino
2. 発表標題 Low English Proficiency University Students' Perceptions of Online language learning
3. 学会等名 10th International Conference on Language, Literature & Linguistics 2023（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 牧野眞貴
2. 発表標題 英語リメディアル授業における振り返りシートの効果検証 - メタ認知に注目して
3. 学会等名 全国英語教育学会第48回 香川大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Masaki Makino
2. 発表標題 Reality of On-demand English Learning for University Students with Low English Proficiency
3. 学会等名 The 9th IAFOR International Conference on Education（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 牧野眞貴
2. 発表標題 Metacognitive Approach in a Developmental English Class
3. 学会等名 9th International Conference on Language, Literature & Linguistics 2022(Singapore) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 牧野眞貴
2. 発表標題 リメディアル学生の英語学習に対する自己効力感について
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会第17回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 牧野眞貴
2. 発表標題 Interactional Competence in Online Language Classes During the COVID-19 Phase
3. 学会等名 2023 Hawaii International Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 牧野眞貴
2. 発表標題 スポーツ推薦入学生の学習を振り返る力について (メタ認知的モニタリングの分析より)
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会第16回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 牧野眞貴
2. 発表標題 Zoom を利用した英語リメディアル授業の現状と課題
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会第13回九州・沖縄支部大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 牧野眞貴	4. 発行年 2021年
2. 出版社 河合塾グループ株式会社KEIアドバンス	5. 総ページ数 63
3. 書名 運動部学生のためスポーツの探求英語入門～英語でスポーツを考えるはじめの一步～	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------